

「2025年度東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学農学研究科修士2年 森寿々花

このワークショップでは、学習面においても、海外でのプレゼンテーションやコミュニケーションの面においても、さまざまな経験を積むことができ、自分自身の成長を強く実感した。以下では、まずこの3点について述べ、その後プログラムの内容について触れる。

まず学習面については、事前のオンライン授業や準備段階を通して、社会学的な視点を学ぶことができた。私は農学部の出身であり、これまで社会学のコンセプトや理論についてはほとんど知識がなかった。しかし、先生方や学生とのディスカッション、発表準備におけるフィードバックを通して新たな視点を得ることができ、大変貴重な経験となった。現地での発表会では、台湾や韓国における社会問題への課題意識の違いを直接知ることができ、とても興味深かった。

次に、海外でのプレゼンテーションに関しては、自身のこれまでの留学経験の成果を実感できる良い機会となった。私は昨年度オランダに1年間留学しており、そこで語学力の不足を痛感した経験があったが、今回のワークショップでは自信をもって発表することができ、成長を実感した。また、他の学生の発表に対しても積極的に質問や意見を述べることができ、有意義な時間を過ごせた。それだけでなく、他大学の学生の発表の着眼点や手法、レベルの高さに大いに刺激を受け、今後の学びへのモチベーションにもつながった。

コミュニケーションの面では、プログラム中に多くのフィールドワークが用意されており、班行動や食事の時間を通して韓国や台湾の学生と交流する機会が数多く設けられていた。参加者の中には英語が堪能な学生もいればそうでない学生もいて、互いに助け合い、学び合うことができた。日本人学生同士でも発表内容について意見交換を行い、お互いの発表を聞き合って改善点を見つけるなど、切磋琢磨しながら成長できる良い関係を築くことができたと思う。

プログラムは2日間のプレゼンテーションと2日間のフィールドワークで構成されていた。プレゼンテーションの日程では、多くの学生の発表を集中的に聞くこととなったが、どれも個性豊かで幅広い分野を扱っており、興味深く学ぶことができた。フィールドワークでは、博物館での歴史学習やLGBTQ関連のNPOの方にお話を伺うなど、発表と同様に多様な社会的課題を考える機会が与えられた。博物館では日本が植民地支配していた時の展示も見たが、それが芸術や展示物にどのような影響を及ぼしたかという点が印象深かった。また、台湾独立をテーマとした映画を台湾、韓国、日本の学生と共に視聴し、その後台湾の学生から直接話を聞く経験は他にない貴重な機会であったと感じている。さらに、すべてのプログラムにおいて先生方が

学生と共に行動され、自分の発表へのフィードバックや各社会問題に関する意見を伺えたことも、学びを深める上で非常に有意義であった。

海外で自分の研究テーマについて発表する機会を得るのは難しく、このワークショップを通じて意見交換の機会を得られてとても良かった。英語での発表はハードルが高いと思われるかもしれないが、みんなで助け合ったことでこのプログラムの雰囲気はとてもよく、どの学生も挑戦しやすいとても良い機会だったと思う。